

「多様性は宝」

細矢 剛

昭和 57 年卒 34 回生
国立科学博物館

生物多様性という言葉聞いたことがありますか。世の中には様々な種がいること(種の多様性)、さらに同種でもいろいろな特性をもったものがあること(遺伝子の多様性)、それらの種の集まりにも多様なものがあること(生態系の多様性)、を表す言葉です。生物は単独で生きることなくかならず他の生物と関係をもっています。多様な生物の存在は関係の多様性をもたらします。すると、様々な関係が網の目の様につながり、バイパスができることによって、たとえある種が絶滅してどこかの関係が途切れてもその被害は全体におよばなくなり、つまりは系全体が安定する、ということを意味しています。私は、現在博物館において、菌類(カビ・きのこ・酵母)の多様性を研究しています。多くの研究者は、大学(あるいはそれ以前)から、一貫して特定の研究テーマに取り組めます。しかし、私の場合は、ここにたどり着く間に、多少なりとも多様な経験をしてきました。

卒業論文・修士論文では、カビの分類を扱い、就職した後には、約 13 年半にわたって、製薬会社でいろいろなカビを培養して、有用な生理活性物質をみつける探索研究に従事しました。つまり、私は大学で学んだ知識を直接生かすような産業の道に進みました。しかし、その後、本社の企画部門に移り「糖尿病薬の研究・開発・販売の世界戦略」という、まったく異なる仕事に従事することになりました。仕事の性質はまったく変わり、実験のかわりに会議、データ整理のかわりにプレゼンの準備、菌と向き合うかわりに人と関わる時間が増えました。海外とのつながりも増えました。もちろん、学会の発表や、会合の運営などは研究分野とも共通していましたが、環境も扱う事項も全く異なる世界に飛び込み、最初はまったく手も足も出なかったものです。しかし、1 年も経つと、

徐々に勘所が分かってきました。手元にあるデータを整理・比較して足りないデータを調べたり、作業の問題点を見つけて解決していくのは、分類の研究でも企画でも変わらないのです。そして、本社では、菌類の研究だけでは得られないような性質の仕事や会合に出席して、いろいろな経験をすることができました。

その後、縁があって、再びアカデミアに戻ってきましたが、今度は従来の様な菌類の研究に加えて、「地球規模生物多様性情報機構 GBIF

(<http://www.gbif.org/>)」という活動に参加して、菌類に限らず、日本の様々な生物の多様性情報を収集して、国際社会に発信し、多様性の保全などにも貢献する、という仕事もしています。いろいろな国の人たちと会合をしたり、専門外の分野に向き合うのは、本社での経験が生きています。

振り返ると、私は、アカデミア、応用研究、ビジネスと様々な経験をしてきました。研究だけの世界で生きていけば、ビジネスの経験はいらないかとも思います。しかし、逆にビジネスの世界で契約書を読んだり、会議を運営した経験が、現在の共同研究や、新たな交流のために役立っています。多様性は人の経験の中にもあります。多様な経験が適応力を高め、人間の安定性を高めます。これから大学・社会に出て生きていく高校生みなさん、自分の道を一本だけ決めるのも大切ですが、多様な経験をするのも大切です。進路を決める時には、一つに決めつけたり、思いこまずにいろいろな経験をするを自ら心がけましょう。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)